

No.66 情緒課題03学級経営の課題

義高 互

情緒学級経営の難しさ

これは私にとっては課題の残るお恥ずかしい提示です。もう20年前にもなり、当時の教員もほぼ退職にもなりました。成功の事例より課題が明確な事例が必要だと思ひ提示します。これは情緒学級を担当して中1年時は課題が解決して良い成果が出た半面、中2年時になり指導体制を変えて学習状況が暗転した例です。このグラフは学習規律、課題行動、学習量などを総合してスコア化したグラフです。1年時に上昇して2年時に下降した様子があらわれています。

このグラフはそれらを分解したグラフです。これを見ると、良くなる時は、学習規律が良くなってから各要素が好転しています。情緒学級で適切な授業規律が成立すれば、学習活動ができるので学習量が増えます。指導の必要性も減るので問題行動も摩擦も減ってきます。そのような良い形ができてきたのが中学一年の時でした。しかし中学2年になって状況は一転し低下してしまいます。

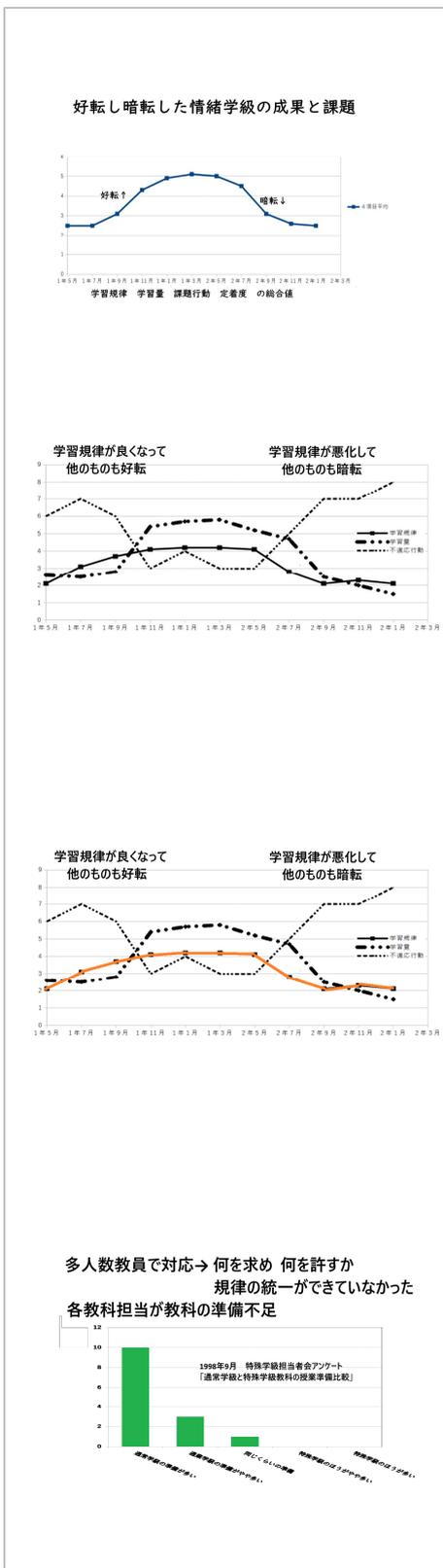
何が原因だったのか。それを読み解くカギがこのグラフにありました。

1年次は授業規律が成立し、その後学習用が増え、トラブルも激減していきました。

2年次は全く逆です。授業規律が乱れ、学習しなくなり、他者とのトラブルが激増したのです。

課題は授業規律にありました。1年時は成立して好転したのに、2年時は乱れたのです。では何故でしょうか。授業規律を確立させる為に必要なことは規律指導の統一でした。

1年時は特支担任一人でほぼ全教科を担当しました。情緒に支援が必要で人と一緒に居られな



い子どもと一緒に全教科を共にするのは厳しかったです。しかし規律指導が統一できたので授業規律は成立し好転しました。

2年時は各教科担当や支援員の人も合わせ複数教師が授業に入りました。「全員参加でさらに良くなる」という方針でした。しかし結果は逆に大きく乱れたのです。

各教師の、何を求め、何を許すという授業規律がそれぞれで違っていたのが、後になってわかりました。

中学校は教科で学習活動が違います。どこかの時間に規律の違いが出ると、安きに流れて、ルールが違うからやらなくてもいい、という規律になりました。

資料を見てください。これは1990年のアンケートで特殊学級の準備が充分かの結果です。特殊学級と通常学級を並行して担当する教科担任は、特殊学級の授業準備が不十分であるという回答でした。

各教科が準備不十分で学習規律が違えば、授業規律は安きに流れ、不安定な形で子供のこだわり、になった可能性があります。もし多人数で情緒学級を担当するなら、3つの条件が必須になると思っています。

一つは、学習規律で何を守り、何を求め何を許していくか、細部まで指導を統一して学習規律を守ること。

二つ目は特支学級の授業準備を充分行い、曖昧な活動時間を作らないこと。

三つめは在籍の子どもの特性を十分把握して、その支援に適切な学習活動を行うこと。この三つです。

このどれかが不足すれば、支援学級に在籍しても学習規律を乱しを意欲低下させてしまいます。

学習規律や指導の統一については、支援学校中

複数教員で情緒学級を担当する場合

- 何を求め何を許すか 学習規律の詳細まで統一
- 授業準備を充分行い 曖昧な活動時間を作らない
- 子供の特性を十分理解して対応する

他者の感情より自分のこだわりルールを重要視する
一度規律が乱れると立て直しは困難



特支学校を参考に **中学部高等部の作業学習**

- 教員全員が同じ生徒に細部まで同じ対応をする
- その作業で指示を受けた活動を休まず行う
(自分の判断で曖昧な休憩や創作活動はしない)

自分の判断で好きな活動をするや指示通りの創作活動に戻るのが困難となる



学部高等部の作業学習を参考にするのが良い
かもしれません。

作業学習の中では、全体で何を求め、何を配慮
するか。また各生徒には何を求め何を配慮して
いくか。それが全員統一されています。生徒が
どの教員と接しても、指導の対応が変わること
はありません。それが特別でなく当然の前提で
活動します。作業活動の中では、自分が勝手に
何か作るという曖昧な活動をしない事を重視し
ます。

教員によって対応の違いがない事、曖昧な制作
活動をしない事は大前提になります。

恥ずかしながら、私は特別支援学校勤務を経験
しながら、これができていなかったのです。

中学校は教科によって対応や違いが常に許さ
れる、曖昧な自主活動が許されるという見識の
甘さがあったのです。

かつて中学校が荒れた時、一度乱れると卒業ま
で修復はできない、と言われましたし、実際そう
でした。そのことは情緒学級にも当てはまるか
もしれません

END